

特 集

そろそろ真剣に考えよう 胃癌に対する ロボット支援手術

腹(胸)腔鏡下で融通の利きにくい長い鉗子を操りながら繊細な手術を行うのは苦行である。わが国の消化器外科医はこのような困難な手術操作を、時間をかけて高いレベルまで昇華させた。涙ぐましい修練と工夫の賜物である。ところが、ロボットの出現により、そのような修練をテクノロジーの進歩でカバーして目的を達成できる時代となってしまった。腹(胸)腔鏡下手術がそこまでのレベルに達していない領域では、ロボット支援手術の利点を示すのは容易であろう。一方、腹(胸)腔鏡下手術の技術において、すでに高いレベルにあるわが国の胃外科医たちにとっては、今さら臨床的なアウトカムにおいてロボットの利点を証明するのは困難であった。にもかかわらず、これまで腹(胸)腔鏡下手術の可能性を大きく広げてきた、わが国を代表する胃外科医たちが、ロボット支援胃切除術に熱心に取り組んでいる。そこにさらなるポテンシャルが感じられるからであろう。今、どうやってロボット支援手術を導入すればよいのか。そして、努力した暁にはどこまでのことができるようになるのか。本特集でぜひ学んでいただきたい。